

# 内モンゴルにおける「生態移民政策」実施プロセス

サラナ

## 1 はじめに

これまで環境保全のために農業や遊牧を禁じ定住区に移住させる「生態移民」政策に関して、様々な問題が指摘されている。「生態移民」政策によって、環境は改善している場合もあるが、一方で、収入減少や就業トラブルなど様々な問題が起こっている。しかし、これらのトラブルの原因はどこにあるか、実際の実施プロセスにおいて、どの段階でどのような問題が起きたか、などについての具体的な事例についてはあまり検討されていない。そこで、本稿では、A鎮における「生態移民」政策に注目し、現地調査から政策実施プロセスと結果を明らかにし、その過程で具体的にどのような問題が起り、その原因は何か、また住民がどのように反応したのかを論じる。

筆者は内モンゴル自治区X旗A鎮において2010年9月にC氏、D氏、E氏、F氏の家を訪問し、聞き取り調査を行い、移住地の状況を観察した。また、鎮政府を訪ね必要な書類収集をした。その後、日本に戻り、論文を書く段階で分らないことなどを電話で聞き取り調査を行った。また、事前調査として2008の12月に、牧民の移民した後の家や牧草地などの現地調査を行った。

本論文の調査地域であるX旗では、2004年から「区画輪牧」「休牧」が実施された。「区画輪牧」とは自然状況や人為的判断に基づき牧草地をいくつかの単位に区切り、順次牧草地を替えて放牧することを指し、「休牧」とは牧草が萌芽から結実するまでの期間は放牧を停止することを指す。注意しなければならないことは、広い意味での「生態移民」政策には、移住を伴わない初期の政策である「区画輪牧」「休牧」を含むことである。この論文では、区別する必

要があるときは、移住をする狭い意味での「生態移民」を「禁牧－移住」と言うことにする。

本稿の構成は以下の通りである。1では牧民の移住前の生活・家族・居住地と伝統文化を四季に分けて述べる。2では西部大開発での背景と「退牧還草」、内モンゴルX旗における「生態移民」政策について述べる。3では調査地X旗A鎮における「生態移民」政策実施プロセス（禁牧－移住）前までの内容と問題を分析する。4では「生態移民」政策によって発生した問題と課題を取り上げ、住民の生活にどのような影響をもたらしたのか、左右する問題とその要因について調査事例から分析し、考察する。「おわりに」では、先行研究をふまえ、調査結果から新たな行政の対応と今後の展望について述べる。

## 2 伝統的な牧民の生活：「生態移民」政策による移住の前

### (1) 牧民の家族と生活

#### 〈牧民の家族と居住地〉

遊牧民は一箇所に定住することなく、一年間を通じて何度か移動しながら牧畜を行って生活している。多くの場合、数家族からなる小規模な大家族単位で家畜の群れを率い、移動する。中国・内モンゴルでは、人民公社解体後は牧草地が分配され、定住型の家を建てる傾向が強くなった。

牧民の居住地は地域によって様々だが、本論の調査地であるA鎮牧畜地域はオールドス市の西北部の乾燥地域である。北に3キロから5キロ行くと黄河が見え、農耕地区になる。

牧民は冬と春は、大きな家が建てられた冬営地に居住する。家は煉瓦や土で建てられたものであり、大きさは家庭によって異なるが、だいたい部屋の広さは90平方メートルから120平方メートルである。ある一家の例を示す(図1)。母屋の他に家畜小屋があるが、そこには出産するヤギのための部屋、出産後の母ヤギと子ヤギの部屋がある。倉庫と干し草置場もあり、作業用の囲いもある。作業用の囲いでは、ヤギの毛の採取、家畜の治療などが行われる。この地域は乾燥しているため、ヒツジは少ない。ラクダは乗用のものだけ、家の近くで飼っている。その他に牛(牛肉)とラクダを所有しているが、他の人に頼んで飼

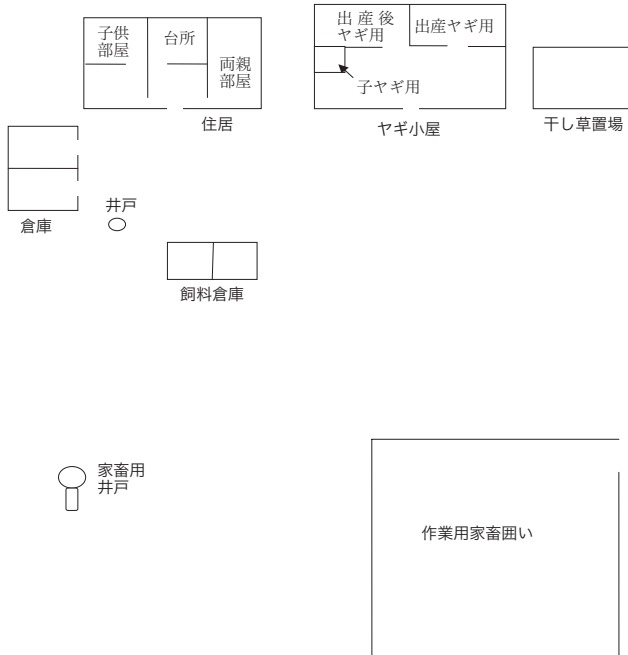


図1 牧民の冬の住居

われている。これは、農業地区に入り込まないように、離れた場所で飼うためである。

それ以外に地域によって異なるが、1人当たり約1000ムー（15ムー＝1ha）の牧草地がある。これは第一回牧草地分配の時の1988年から続き、1998年から30年変わらないと決められている。

夏になると、夏営地に移動し、秋になると秋営地に移動する。夏営地と秋営地は冬営地と異なり、固定の家を持っている家庭もいれば、ゲル等を建てて暮らす家庭もいる。

### 〈牧民の食生活〉

モンゴル人は昔から毎日乳で作ったチーズなどのチャガン・イデー（白い食べ物）とウラン・イデュー（赤い食べ物）を食べてきた。「白い食べ物」は主に夏に作るものである。ヤギは春に出産し、夏7月・8月になると子ヤギが大

きくなり母乳だけではなく、草を食べて栄養を取れるようになる。その頃から、夜に母ヤギを子ヤギから離し囲いに入れて、次の朝に乳を搾るのである。その後、その乳で発酵させたり、沸騰させたりして様々な乳製品を作る。

夏はヤギが新鮮な草や水を吸収することができ、搾る乳の量が増加するのである。そこで、秋から翌年の夏までの「白い食べ物」を数多くの種類に加工しておくのである。牧民は「白い食べ物」を毎日の朝食のほか昼休憩などのおやつとしても食べるのである。

「赤い食べ物」はウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギの肉のことである。肉は一日三食には必ず出てくる。牧民は秋の終わり冬の始まりにかけて、冬から春までの食肉用に家畜を殺し、その肉を食べやすいように切り、倉庫に干しておく。倉庫は風通りがよく冬は自然に肉が凍り、まさに、天然冷蔵庫である。肉の量は家族の人数によって異なるが、四人家族はだいたいヤギ8匹ぐらいである。「赤い食べ物」は煮たり、焼いたり、炒めたりして食べることができる。

#### 〈牧民の結婚式〉

牧民の結婚は、男性は20～25歳、女性は18～25歳が普通である。家と家の結びつきが今よりも強かった昔は、両親の間で決められるケースが多かったが、現在はほとんど恋愛結婚になった。結婚式の服はモンゴルの民族衣装が多い。

冬は結婚の季節と言われている。結婚式は臨時で作った大きなゲルの中で行われる。人数は多い時で100人ぐらい、少ない時は70人ぐらいで2～3日間行われる。場所は家のすぐそばに大きなゲルやテントを建て、家の倉庫に臨時で竈を建てそこで、結婚式の料理を作るのである。結婚式の日目は、昼過ぎから参加者が集ったところで、はじめに、新婦は披露宴で親族友人から、お祝いの言葉とともに現金やプレゼントもらい、挨拶とともに酒をすすめ、その後、自分の部屋に戻る。次に、新婦の両親が挨拶とともに酒をすすめる。

次に、料理の時間になり、祝宴を終えると日が暮れ、新郎が新婦を迎えに来て、まず、新婦の両親に挨拶し、二人でみんなに挨拶とお酒をすすめ、新婦側でみんなが歌や踊りを楽しみながら一夜を過ごす。

二日目、日の出と同時に、新婦の兄弟や親戚、友人など20人から30人で新婦を新郎側に送って行く。そして、二人は新郎側で新婦側と同じ儀礼を行うの

である。夜になると送りに来た人たちが戻る。この頃、新婦側ではまだ歌とお酒で盛り上がり、送りにいった人を待っている。戻ってきたら、みんなに新郎側の状況を報告して盛り上がる。

三日目、結婚式でお世話になった人達を集め、お礼をして盛り上がる。または、遠い所に嫁に行き送りに行った人たちが当日戻って来られない時は三日目まで延長する。

## (2) 牧畜と四季

### 〈春：ヤギの出産とカシミヤの採取〉

春は四季の中で最も忙しい季節である。それはヤギの出産とヤギ毛梳きである。これが牧民のサイクルであり、ヤギは夏に備えてカシミヤを梳くのである。

ヤギの出産は、牧畜の年間サイクルの中のポイントである。一年の中で他の三季節はすべてこの春のための準備と置いていいだろう。出産は100匹のヤギが出産するとしたら、大体十日で終わる。この十日間は牧民が最も忙しく、最も疲れる日々でありながら、同時に、最も嬉しい日々でもある。一日大体十匹の子ヤギが生まれるのだ。いつ産むかが分からないため、24時間パトロールを行う必要がある。冬と変わらない寒さの中で、夜中に温かい布団の中から出ることぐらいつらいことはない。牧民達が、毎日寝る前に祈ることはヤギが夜中に出産しないことである。もし見過ごした場合、翌朝凍死した子ヤギを見ることになる。

また、ヤギの出産時期に最も重要な鍵は人間によるヤギの個体識別である。その母ヤギたちは自分の産んだ子ヤギ以外には授乳しない習性を持っているからだ。固体識別は、一匹一匹の色や形、顔つきなどの特徴で区別するのである。また家畜が多い時には、母ヤギと子ヤギに同じ色の紐をつけることもある。

ヤギのカシミヤ（柔毛）の採取は5月から6月まで行う。これはヤギの毛が抜け落ちるのが見えたら始める仕事である。ヤギのカシミヤの梳き方は、ヤギを横に倒し、下の二本の足をひもで縛り、杭にヤギの角をロープで繋ぎ、頭からブラシで梳くのである。片方が終わったら、裏返し、同様にやっていく。一日で、速い人は12～15匹のヤギを梳くことができる。これはずっと地面にし

ゃがんだりして腰がとても疲れる仕事である。それからこの毛を袋に入れておく。この時期になるとほぼ毎日買い取りの人が来るのだが、付ける値段が違うため、値段の交渉で遅くまでかかる場合がある。これが一年の中で最も大きな収入となる<sup>1)</sup>。

〈夏：ナーダムと乳搾り〉

ヤギのカシミア梳きが終わるころにジョサラン（夏営地）に移動する。牧民と言えば自由に移動しているイメージがあるかもしれないが、Yガチャーはそうではなく、移動先が決まっている。なぜならば、黄河から近いいため、夏にはヤギたち新鮮な河辺の草、豊かな水を与えるために黄河の近くに移動するのである。しかし、夏の家は冬と春に住む家の約1/3の広さで約40平方メートルの狭い住居である（図2）。

黄河の近くは農業地帯のため、自由に放牧すると農作物を食べてしまうため、誰かが見張っていなければならない。夏の放牧はヤギがバラバラにならないよう、農地に行かないように見張るのが重要なポイントである。夜7時ぐらいに満腹となったヤギたちは自分で家に帰りずらりと寝そべるのだ。遠くから見ると、まるで真っ白な絨毯を敷いているように見える。そして、夏の夕焼けの時

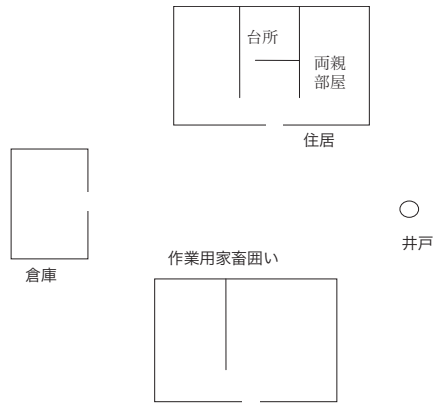


図2 牧民の夏の住居

間は、鳥の声、カエルの声、子ヤギが母ヤギを探している声などでとても賑やだし、この白い絨毯の先には色彩鮮やかな草地、またその先には東へ流れる黄河がある。この景色は夏にしか見られない絶景である。

夏には誰もが楽しみに待っている祭りナーダムがある。ナーダムとはモンゴル語で「遊ぶ」という意味を持つ。ナーダムは地方によって内容が異なる。Y

1) 一匹のヤギから約300～500gのカシミアを採取できる（地域によって異なる）。値段は年によって異なるが、1キロ＝220～250元になる。100匹＝約20000元に相当する。

ガチャーのナーダムは主にモンゴル相撲、綱引き、歌舞、リレーなどである。

夏はチャガン・イデーを作る季節である。地域によって牛乳、馬乳をしぼるところもあるがYガチャーではヤギの搾乳が普通に行われている。ヤギの乳搾りは7月ごろに始まる。春に生まれた子ヤギが大きくなり母乳だけではなく、草を食べて栄養を取れるようになると夜に子ヤギの母ヤギを子ヤギから離し囲いに入れて、次の朝にその乳を搾り、いろいろなチャガン・イデーをつくる。その量は次の夏までに食べる量であり、つまり、一年間の糧を得るため大きな作業となる。

〈秋：草刈りと食料の確保〉

10月になるとオトル（秋の移動）をする。その目的はヤギを太らせることであり、秋の収穫が終わった後、落穂と農地の周りにある新しい草を食べさせるため、農地の近くに移動し、約一カ月在住する。秋の住居は一時的な滞在を目的とするため、夏の住居よりさらに小さい（図3）。

秋に牧民はヤギが冬から春に食べる餌を収集する。草刈りをし、畑の落穂を冬の住まいに運び、餌にするトウモロコシ、大豆などを買う。トウモロコシと大豆は早生まれの子ヤギと母ヤギ、また春に出産する母ヤギに食べさせる。また、大雪でヤギが草原に出られないときに食べさせることもある。

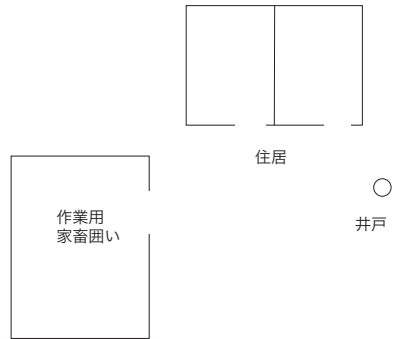


図3 秋の住居

草刈りは9月に行われる。草刈りはとても体力を使う仕事である。牧民は朝明

るくなる前に家を出て、昼の暑いときには家に戻る。また夕方に出かけ、太陽が沈むころ帰ってくる。この繰り返しを一週間する。それから刈った草が乾燥したら、それを50センチの太さで巻き、冬営地へ運ぶのである。

秋にはまた、家族の11月から5月まで食べるジャガイモを買い、地下室に保存する。白菜も200キロぐらい買って塩付けにし、壺の中に入れ醗酵させる。冬になると凍るため、翌年の春まで食べることができる。そして雨の多い年は、

キノコを取り、紐に通して干す。11月から5月まではこれらのものを食べるのである。

#### 〈冬：飼料配りと正月〉

11月には冬営地に戻る。冬と春は同じ場所にいるためヤギは自分の牧草地を知っていて、人が誘導する必要がなく、昼ごろにラクダやバイクに乗って様子を見るだけで良い。方向によって行く必要のない日もある。その代わり、冬は砂漠の中にいるため、豊かな水は飲むことができなくなる。そこで人工で掘った井戸から人力で水を汲み出すのだ。これは寒い冬にとってもきつい仕事であり、ヤギたちが集中して来ると、とても重労働である。もし前もって水を用意して置くとヤギが来る時には凍ってしまうため、ヤギの姿が見えてから汲み上げるため、一人では間に合わない。二人交替でやるのだ。

また、春に出産するヤギの体力を落とさないように秋に収集した餌を与える。秋に刈り取った草やトウモロコシや大豆を、春に出産するヤギに、冬から与えるのである。朝、ヤギの群れが草地に出る時、母ヤギを残し、飼料を与える。

正月は旧正月であり、主に2月頃に行われる。お年寄りが楽しみにしている伝統行事である。家族、親戚が集まり新年を祝う。正月のメイン料理は「オート」<sup>2)</sup>というヒツジ一匹をまるごと煮たものと「ポーズ」という肉餃子が代表的なもので、豪華に食卓を飾る。祝い終えるまで3～5日間はずっと同じ食べ物の繰り返しになる。

新年の前日、ビトゥニーシュヌ（大みそか）に家族全員が集まり、今年も災いなく終わり、新年を無事に向かえられるよう祈り、ポーズを食べながら年越しをする。お腹が一杯になるまで食べるのは、新しい年も食物が豊富であるようにとの祈りの意味でもある。

シニーン・ネゲン（元旦）には朝5時ぐらいに起き、お茶を作り、テーブルを食べ物で飾り始める。これは自分たちだけが食べる物ではなく、お客にも食べさせるものである。そして、少し明るくなったら、家の前に飾ってあるスウルデ<sup>2)</sup>の前にテーブルを置き、チャガン・イデー、スーテツアイ（乳茶）、

2) モンゴル帝国の象徴だったもので三つ又の鉾を表す鉄でできた飾り。幸運のしるしとしてミルクやお酒をその方向にささげる。



お酒、お菓子を並べ、家族全員で「天」に新年の挨拶をする儀礼がある。それから家に戻り、子供が親に新年の挨拶をする。ハダッグ<sup>3)</sup>をささげ、右膝を下げ、頭も同時に下げ親から新しい一年の願い言葉を聞くのである。これは親だけではなく、年長者皆に同じ形で新年の挨拶をする。そうすると新年の挨拶のお返しとして、親戚の人はお金、家畜などを、親戚ではない人はお菓子を返してくれる。私たち兄弟は、中学までメスの子ヤギを一匹もらっていた。しかし、高校に入るとヤギよりお金の方がいいと言って、お金に換えてもらっていた。

二日目は親戚、知人などの家を回ったりする。三日目は父方の兄弟が祖父の家に集まる日である。それ以降は、お世話になった人や親戚の家を自由に回る。

## 2 西部大開発と退牧還草

### (1) 実施の背景

自然条件、地理的条件、そして歴史的条件により、中国西部の経済成長は、東部と比べ明らかに後れをとってきた(図4)。地域間の経済成長格差は1990年代中後期にさらに拡大した。そこで、「地域経済の調和ある成長、地域格差の縮小、民族団結の強化を促進し、辺境の安全と社会の安定を守るため」中国共産党の中央指導部は20世紀から21世紀への変わり目に、西部大開発戦略を本格的に始動した<sup>4)</sup>。



図4 西部大開発対象地域の地図

(出典：加藤弘之 2003：154)

「西部大開発」の重点政策として、①インフラ建設の加速、②生態環境保護の強化、③農業基盤の強化、④産業構造の調整、⑤特色ある観光業の発展、⑥科学技術・教育・文化・衛生事業の発展の6点が挙げられている。21世紀の

3) 敬意を表すために相手にささげる布。

4) 人民網日本語版2010年1月11日

中葉には「経済が繁栄し、社会が進歩し、生活が安定し、民族が団結し、山川秀麗な」西部地域をつくりあげることが目的であるとされた（加藤 2003 : 155）。

西部は国境を接する辺境地域であると同時に、多数の少数民族が居住している地域でもある。西部は全国の少数民族人口の8割以上が集中しており、少数民族の生活水準を向上させることは、社会的安定維持のために不可欠である（王 2010 : 65）。

2001年に中央政府は「中国農村開発概要（2001-2010年）」の中で、少数民族で生存条件が悪い所に居住し、自然資源の極めて貧しい人口に対し、「退耕還林・還草」政策を実行し、移住させることを決めた。

## (2) 内モンゴル自治区X旗における「生態移民」政策

内モンゴル自治区では2001年に大規模な「生態移民」政策を始めた。「生態移民と異郷における貧困救済移民のモデルプロジェクトの実施に対する意見」によると、全自治区範囲以内の砂漠化、草原退化と風土流失が深刻に進んでいる生態環境が脆弱な地区に対して「生態移民」政策を実施し、2002年から6年間の間に、内モンゴル自治区の「生態移民」が65万人に達した。

オルドス市（図5）に属すX旗政府は、2006年オルドス市の農牧局の経済「三区」発展規則に従って、農牧経済「三区規則」を編成した。それは「禁止開発区」、「制限開発区」、「合理化開発区」である。「禁止開発区」には5のソム・鎮、20の行政ガチャー・村が対象となった。総面積は10033平方メートルであ

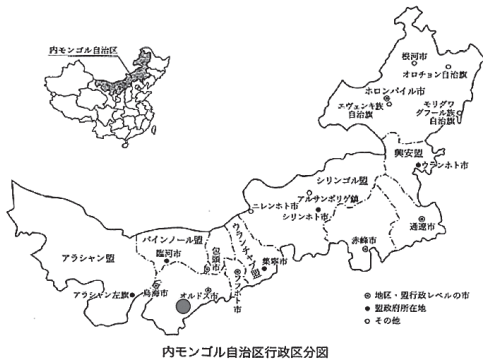


図5 内モンゴル・オルドス市  
（出典：ソロンガ 2007 : 106）

り、約27200人が対象になった<sup>5)</sup>。

X旗政府の「生態環境回復事業に伴う移民の就業育成の方針について」によると2007年の「生態移民」政策状況は以下のようであった（X旗人民政府文献2007；36号）。

2007年政府は環境資源力を守り、人口構造を計画し、引き続き農村畜産地区の人口移動プロセスを推し進めた。それは2007年の農村と畜産地区人口移動の任務として、指導する4000人を訓練し育成する、職業技能3700人を訓練し育成する、農村畜産地区移動人口8000人、そして、生態自然回復区3000平方km範囲内の人、家畜全部退出し、自然を頼り、生態回復をまとめる。

X旗では「生態移民」政策実施以来、現在まで農牧民合わせて3723戸、9403人が移住した。その中で、2007、2008年のプロジェクト地区は4364平方メートル、関係する戸数は2493戸、6328人で、現在はその全員が移住した<sup>6)</sup>。

#### 4 調査地における「生態移民」政策実施プロセス：「禁牧－移住」の前まで

##### (1) 地域と調査対象と調査方法

〈調査地域：X旗A鎮〉

X旗の総面積は1.89万平方km、総人口14.6万人、うち、モンゴル民族2.3万人、漢族が多数を占める地区である。X旗は生態環境が比較的脆弱であり、北部の黄河周辺以外、約80%は乾燥した砂漠地区である。

A鎮は、地理的に内モンゴル自治区オルドス市の西北部に位置し、X旗<sup>7)</sup>に属している（図6）。A鎮の北側に黄河が西から東へ41キロ通過し、流れている。総面積は1226平方kmである。五つの

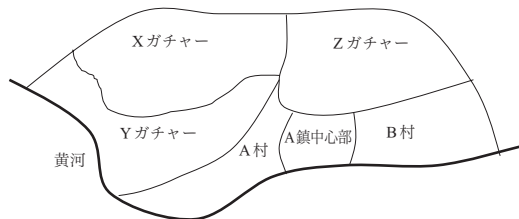


図6 A鎮の模式地図

5) X旗農牧局2008年上半年期における業務総括参照。

6) X旗農牧局の資料より。

7) 内モンゴルにおける市の下の行政区分である。オルドス市には8の旗がある。

ガチャー・村、一つの小区（町）委員会で形成され、半農半牧地区である。総人口は10079人である。そのうちの草原が60万ム<sup>8)</sup>であり、耕地が6.5万ムを占めている。人、うち農民が8割で牧民は2割である。総人口のうちモンゴル族は1785人（約18%）で、残り（8割以上）が漢族である<sup>9)</sup>。

筆者はA鎮の三つのガチャー（これらをX、Y、Zとしておく）を中心に調査を行った。3のガチャーのうちXガチャーは純牧畜業を営み、YガチャーとZガチャーは半農半牧地域である。

### 〈調査方法と調査対象者〉

調査対象者として「生態移民」をした6世帯を選び、筆者が家長に対してインタビュー調査を実施した（表1参照）。家長の6人は異なる年齢の人を選んだ。6人のうち年長の4人には「生態移民」政策プロセスについてインタビュー調査を行った（表1）。若い二人は、出稼ぎの前は両親と同居していたため、プロセスについてはインタビューしなかった。Xガチャーは牧畜を生業としていた地区で、Y、Zガチャーは半農半牧地区である。元の生業は、C氏は半農半牧、他の5人は牧畜であった。

表1 調査対象者の状況

	A氏	B氏	C氏	D氏	X氏	Y氏
年齢(歳)	25	36	40	50	68	70
性別	男	男	男	男	女	男
家族	2人	3人	3人	4人	2人	2人
職業	出稼ぎ	出稼ぎ	農業	臨時業	無職	無職
配偶者の職業	食堂職員	出稼ぎ	農業	臨時業	夫は死亡	無職
移住前	Xガチャー	Yガチャー	Zガチャー	Yガチャー	Xガチャー	Xガチャー
移住後	X旗中心	登口 <sup>10)</sup> 県の中心	Zガチャー	A鎮	A鎮	A鎮
年収/元	約5万	約7万	約5万	約4.5万	約2万	2万

注：筆者が調査結果から作成

8) 15ムが1ヘクタールに当たる。

9) 「X旗政府ホームページ」[www.hiq.gov.cn](http://www.hiq.gov.cn)

10) オルドス市の隣に属する県である。

若い二人のA氏（20代）とB氏（30代）は出稼ぎをしていて、C氏（40代）は現在農業を営んでいる。D氏（50代）は臨時業（畜産業）をやっている。X氏とY氏は現在無職である。現在の生活と収入については、若い二人とC氏はまあまあ満足しているが、年長の3人はA鎮の中心部に住んでいて、安定した仕事がない状態であり、今の生活に不満を持っている。

## （2）A鎮における「生態移民」政策の実施状況

### 〈A鎮の「生態移民」政策実施地域の概要〉

政策実施プロセスは表2の通りである。2002年12月14日に首相の朱鎔基が、「中華人民共和国國務院令（第三六七号）」公布した「退耕還林条例」（「退耕還林（草）」とは、土地を耕すことを止めて、その土地を森林（草原）に戻すことを意味する）により実質的な「生態移民」政策が始まった。しかし、当時内モンゴルX旗ではまだ「生態移民」政策と言う言葉が出ていなかった。A鎮は2004年から「生態移民」政策（「区画輪牧」と「休牧」）が実施され、2007年から2008年にかけて「禁牧」事業が実施され、2008年の9月には全員退出し、それぞれの場所に移住したのである。

表2 A鎮における「生態移民」政策実施プロセス

実施時期	政策	内容
2001年～2003年	2001年政策	罰則のない禁牧政策
2004年～2007年	「休牧」	牧草が萌芽から結実するまでの期間放牧を停止する
	「区画輪牧」	牧草地を区切り順次牧草地を変えて放牧する
2007年～2008年	「禁牧」	放牧することを完全に禁ずる

注：筆者作成

また、鎮政府関係者にもインタビューし、資料を収集した。表1は政府関係者以外の調査対象世帯の生活状況の概要である。詳しい生活状況は4で述べる。

### 〈2001年の政策〉

2001年の「西部大開発」プロジェクトの重点政策のなかでは、インフラ建設および生態環境保護が特に重要な位置を占めていた。その環境保護は現在の

「生態移民」政策初期段階であるが、内モンゴルでは、全自治区範囲内の砂漠化、草原退化と風土流失が深刻に進んでいる地区に対して「生態移民」政策を実施した。当時は主にアラ善砂漠、烏盟山岳地区、錫盟草原退化区が対象地域であり、X旗A鎮は対象地域ではなかった。

しかし、X旗A鎮でも「禁牧」事業を実施することを発表された。2001年のガチャー会議<sup>11)</sup>で「過放牧により環境が悪化しているため、放牧を禁ずる」という話があった。しかしその後、政府からは特別なルールや罰則などが決められていなかったため、A鎮では実際には実施されなかったのである。

D氏のインタビューによると「ガチャーの会議で「禁牧」すると話を聞いたときは心配とショックでいっぱいでしたが、その後この話はあまり耳にしなくなり、みんないつも通り放牧をしていた。中国経済発展に伴い、ちょうど2000年ごろからカシミヤが値上がりし、ヒツジの皮の値上がり、肉の値上がりなど、家畜の身についているものはすべて値上がりし、牧民の生活がよくなり始めた時期だった。家畜を増やす人も増え、それまで家畜を飼っていなかった人も家畜を飼いはじめていた。当時うちはカシミヤの良いヤギを50匹ぐらい増やした」という。

また、当時の状況をE氏は以下のように語った。「当時は環境保護のため放牧を止めさせると話があったが政府からの補助や罰則など何も行われず、実際は何の変化もなかった。このまま行くのかなあとと思ったら、2007年から厳しくなり、今の状態になっている。私たち年寄りには放牧以外何もできないから悲しいですね。今やヤギ肉が当時の倍近い値段になっているから、そのまま放牧やっていたら今や金持ちになっているかもしれないね」と笑った。

#### 〈「区画輪牧」「休牧」政策〉

2003年からは「退牧還草」事業が実施されるようになった。「退牧還草」とは、家畜を放牧することを止めて、放牧地を草原に戻すことを意味している。内モンゴルで行われている「退牧還草」事業内容は、主に三つに分類し「新三牧」と言われている。すなわち、「禁牧」（一定期間、放牧することを完全に禁止す

---

11) ガチャー会議とはガチャー長の家でガチャーの住民が参加する会議である。

ること)「区画輪牧」(自然状況や人為的判断に基づき牧草地をいくつかの単位に区切り、順次牧草地を替えて放牧すること)、「休牧」(牧草が萌芽から結実するまでの期間は放牧を停止すること)、である。

A 鎮はこの「新三牧」事業は同時には実施されなかった。2003年から2006年までは「区画輪牧」「休牧」を実施し、2007年から「禁牧」事業を実施した。

「区画輪牧」は主にXガチャーで実施された。それはXガチャーが交通不便と飼料購入するには支出が大きいためである。「休牧」は主にYガチャーで実施された。それはYガチャーが黄河により近く、半農半牧であることから飼料が手に入りやすいことからである。

しかし、この政策実施により様々な問題が発生していたことが今回の調査からわかる。

XガチャーのE氏の話によると、「最初始めたのは2004年の春からだだった気がします。「区画輪牧」で一つの区画に沢山の家畜が集まるため、家畜がなくなったり、病気が移ったり、近所トラブルが起きたことも少なくなかった。家畜を減らす家庭もあった。しかし、4月から6月まで必ずしも「区画輪牧」していた訳でない。家畜というものは行こうとしたらどこまででも行けるから、決められた牧草地以外に放牧していた時もしばしばあったよ」という。

Yガチャーは同じ時期に「休牧」事業を実施していた。遊牧民にとって家畜は一ヶ所に定住しないで家畜と共に水や牧草を求めて、移動しながら牧畜を行うことが、今までしてきたことである。しかし、「休牧」では、家畜を囲いの中で飼い、主人が自ら飼料や水を与えることになる。

「休牧」事業を行っていた当時、YガチャーのD氏は、ヤギ430匹、ヒツジ18匹とラクダ8匹の家畜を持っていた。D氏によると、「正直これらの家畜の囲いを作るのも大変な作業だった。立派な囲いを作るのが無理だったため、木を四つの角に立て鉄の網で囲いを作って、草を与えるが、夜中になるとヤギたちは鉄網に隙間を作り、朝見ると半分ぐらいが外にいる状態でした。朝から囲いを直し、出ないようにするが、ヤギは頭が良いため何らかの方法で出てしまう。また、数が多いため世話を見るのが大変だった。5月は一年の中で一番忙しい時期で、うちはその時アルバイトの人4人使っていたが、それでも人手が

足りなかった。兎に角お金が出て行くばかりだった。多数で狭い囲いで暮らすため、病気が発生するし、栄養不足のため体力が落ちていくこともあった。仕方なくやった話だが、昼間は囲いである程度の飼料を与え、夜暗くなってから、もしくは朝方に放牧をしていた時もあった。兎に角いろいろ大変でしたね。そもそも、家畜は囲いで育つものではないから、当時はこの状態で、家畜を飼うなら他の事やった方がマシだと思っていたが、今の生活を見るとまだ当時のほうが良かった」。

## 5 「生態移民」政策実施と発生する問題

### (1) 「禁牧－移住」事業の実施

同じ内モンゴル自治区でも地域によって「生態移民」政策の実施プロセスも違い、移住の際、与えられる補助や補助金も異なっている。

シリーンゴル盟では移住の際政府から「転入地の転入地で暮らすための土地と家を安価で提供する、転入地で暮らすすべての家に「三通」（電気、電話、テーブルテレビを指している）を準備する、乳牛飼育世帯の子どもたちの学費を免除する、政府から乳牛一頭当たり11000元のローンを3年間無利息で提供するなどの条件がある」（那木拉 2009：113）。

オルドス市鄂托克前旗では、移住の際、移民村の71平方メートルの家と30ムーの耕地、家畜の宿舎一つ、豚小屋一つその他補助金（移住前の牧草地により1ムー5元の計算で支払われ面積によって異なり、一世帯当たり約3000元が支払われた（朝勒門其其格 2011））。

A鎮では鎮政府が、生態化地区からできるだけ早く退出できる様に、移民対象者の同意の上で牧民全体の移動を決めた。その期間は2007年3月1日から2012年3月1日までの5年間であり、5年が終了すればまた新たな契約を結ぶことで同意された。

A鎮では「生態移民」政策は強制的に行われ、牧民は移住の補助金をもらう条件として家の屋根を破壊された状態で移住しなくてはならないことになった。

しかし、A鎮は、2001年に移民村を建てたが、「禁牧」政策が遅れたため、



その移民村にはほとんどA鎮中心部の人や外来の人たちが住んでいる。牧民が移住する際、住まいは与えず、家を建てる費用1世帯に当たり30000元の補助、1人当たりの補助10000元プラス建物の取り壊す費用として部屋の大きさにより約20000元～30000元、生活補助金として1人当たり年間4000元が払われた。そのお金をもらい牧民はそれぞれの場所に移住した。

A鎮はこれらの補助以外に、移住した人に対し、男性55歳、女性50歳から、年金として月に450元が支払われる。また、移民に医療保険として国から30%を負担することなどが契約されている。

## (2) 移住後の生活・文化の変化 / 問題とその要因

### 〈6世帯の現在の生活状況〉

まずインタビューした6世帯の移住後の生活状況を簡単に述べる。

A氏は2008年8月「禁牧」政策により家畜を全部売り、家の屋根を破壊され、親と妻4人でA鎮に引っ越しして来た。家は補助金などで購入した。最初に1年は農業などで臨時の仕事をやっていたが、当時の生活に不満を持ち妻とX旗に出稼ぎに行くことにした。2009年4月、A氏は親戚の兄氏の紹介で家具を運ぶ仕事をやり始め、妻は小学校の食堂に入ることができた。

B氏は2008年8月に妻、娘とA鎮から70キロ離れている登口県に引っ越しした。そのきっかけはB氏の姉が15年登口県にいたため、B氏夫妻は補助金などを投資し、登口県でレストランをやることになった。

C氏は2008年まで半農半牧をして来たため、牧草地に家があり、黄河の農地にも家があった。「禁牧」政策で牧草地の家は破壊されたが、沿岸の家はそのままあるため、沿岸の家に囲いを作り、約100匹のヒツジやヤギを飼っている。その他60ムーの農業をやっている。

D氏は2008年4月にA鎮に家を購入し、引っ越しして来た。夫婦ともA鎮で臨時の仕事をしている。D氏はA鎮の近くの企業に臨時で勤めている。妻は政府職員の子供の面倒を見ている。

E氏は2008年8月にXガチャーから息子と二人で移民村に住んでいる、息子はしばしば臨時の仕事をやるが政府からの補助金が主な収入である。

F氏は2008年8月Xガチャーから妻と二人で移民村に住んでいる。収入は政府からの補助と年金である。

A、B、C氏は経済的には比較的満足している。A氏は次のように述べる。「月々入るお金は前より増えた。妻は月1200円で、自分の場合基本給は1000元だが手当とかを入れると1700元～2000元ぐらいです。また、政府からの補助年金が、年間4000元二人で8000元もらえるから日常生活のお金には困っていない。今は子どもが小さいから特別な支出もないです。目標はマンションを購入することなのでそのために頑張っています。「生態移民」政策は私たち夫婦には人生の転換してくれたと思います」。

B氏は「政府からの補助金以外に、レストランの経営により、月平均1万円ぐらいの収入を得ている。「生態移民」政策により生活に不満の人も沢山いるが私たちは今の生活に満足している」という。

D、E、F氏は現在の経済状況に不安や不満を抱いている。D氏は当時、ヤギ430匹、ヒツジ18匹とラクダ8匹の家畜を持っていた。第1章の第2節家畜と四季のカシミヤの値段で計算するとヤギだけで年収85000元になるが、現在は約その半分の45000元である。E氏は当時、ヤギ150匹、馬2匹、ラクダ15匹の家畜を持っていた。D氏のように計算するとヤギだけで30000元に対して今は約20000元である。F氏は「子供が大学を通っている親がだいたい臨時業や近くのガソリンスタンドや美容室などで働き一生懸命子供の為に頑張っているが、子供がまだ小さい家庭や独身の人は移住する時のお金を使い、結局仕事も見つからず、お金も使い終え、今困っている人が結構みられるよ。やっぱり一度に多額のお金もらうとこんなことになるよね」と語った。

#### 〈生活の変化：生業〉

家畜は、遊牧民にとって単なる生産手段にとどまらず、生活手段としても使われてきた。いわば家畜は牧民に最低限の生活・生産手段に直接提供し、彼らの自家消費経済システムを維持するのに貢献してきた。しかし、移民はこれらをすべて失ったと言っても過言ではない。D氏の話によると、移住前の仕事は家畜と一緒にあり、すべて自分自身で決めて、進行してきたが、今は臨時の仕事でもやり方や人間関係などでトラブルが多く、気遣うことが増えたと言う。

牧畜業では高齢者になっても、歩ける状態であればやることはある。つまり、死ぬまでやることがあると言っていいだろう。しかし、移住後は、高齢者には仕事がない状態である。政府はこれから就業問題に力を入れていく方針だが、高齢層の職業は難しいと思われる。

A、B、C、D、E、F氏の中で家畜を飼っているのは、半農半牧地区のC氏1人である。C氏は家畜について以下のように述べた。「家に囲いを作り、約100匹のヒツジやヤギを飼っている他、60ムーの農業をやっている。ヒツジは飼っているがこんな経済状況の中でそうそう食べられない。やっぱり大事に育てようと言う気持ちが大きいですね」と言う。A、B氏は若年層ということもあり、都市に出て新しい挑戦をしており、現在の職業に満足している。D氏は現在の職業について「安定した仕事はなく、A鎮の近くの畜産企業で働いているんだけど、人間関係や仕事上のトラブルもあり、牧畜業みたいに自由じゃないし、精神的に疲れる」と言う。「牧畜やるには年齢制限はなく歩けるならやることはあるが、今は元気だけおじいさんおばあさんはだれも使ってくれないよ」と言う。F氏は「なんでも若者が優先で、私たち年寄りには仕事はないよ。街の人はこういう生活になれているんだろうけど、我々にはやっぱり、草原でのいつも何かやることがある生活がいいね」と言う。現在仕事がなく年金と補助金で生活している。

#### 〈生活の変化：食文化〉

モンゴル民族の歴史から引き継がれてきた家畜から獲得して食べる遊牧民の主食である「白い食べ物」と「赤い食べ物」が主食として食べられなくなった。それは、移住の際、牧民は家畜を処分したため生業ができなくなったからである。もちろん、肉を買うことはできるが、従来の味や形とは異なるものであり、しかも、価額が高い。近年中国の経済発展に伴い物価が急上昇している。

元々農牧民であったC氏は経済的には満足しているが、食生活の変化に戸惑っており、次のように述べる。「政府からの補助金もあり今の生活（収入）には満足しているが、一方、食生活と伝統文化の損失にとってもショックを受けている。しかし、現在は各家庭の食卓に大きな変化が起きている。放牧していた時、日常的に当たり前前に食べられた食物が消え、代わりに食べ慣れない豚肉、鶏肉

が食卓に上がるようになった。食物の変化は文化全体に大きな変化を与えていると思う。ヒツジは飼っているがこんな経済状況の中でそうそう食べられない。やっぱり大事に育てようという気持ちが大きい。それに関連するモンゴル民族の古くから受け継がれてきた儀礼、儀式、習慣などが喪失している。

A氏は「前よりいろいろ便利になったが、支出が増えた。肉食が大幅に減り、野菜を食べることが多い。肉を前みたいに食べられなくなったことと伝統行事ができなくなることが寂しい」と言う。

F氏は「最近野菜は体にいい、栄養があるとよく聞かすが、我々にはやっぱり、塩味の肉がいい」と言う。

#### 〈生活の変化：通過儀礼〉

結婚は通過儀礼の一つであり、重要な儀式でもある。移住先で行われる結婚式は従来の結婚式より簡略されている。その理由は移民の周囲の人々の結び付きや、他の社会への進出などに伴い漢人の影響を受けていることが原因だと言えよう。また、従来の伝統生活の喪失や自家消費の経済システムの崩壊にも大きくつながることが読み取れる。

移住前の結婚式については第1章で述べたが、移住後は鎮中心部のレストランで行うことが多い。一日目は、夕方から集まり、新郎が新婦を迎えに来た後お酒をすすめに回ったら、近所の人々は解散し、遠くから来た人はホテルなどに戻る。二日目は、新婦を送る人のみ集まり、食事をしてから出発する。

結婚式について、F氏は、「モンゴル族の通過儀礼もだんだん漢化されちゃった。移民するまで僕は、Eガチャーで結婚式の歌手やっていて、Eガチャーの結婚式にはほとんど招かれていたけど、今は私みたいな爺さんは誰も呼んでくれない」と寂しい顔をされた。

#### 〈生活の変化：親族と近隣の付き合い〉

今まで近かった家族や親族がバラバラになり、互いに会えなくなった。新しい場所に移れば新たな付き合いが生まれる訳だが、それは、今までとは異なるものである。望むものや談話が合わないことが生まれることにより近隣の付き合いが薄くなることが多い。また、今まで遊牧生活以外の生活を経験したことのない牧民は、中国語（普通語）があまり話せないことから、家から出なくな

るケースもある。E氏は「移住前は近所付き合いが深かったが、みんなバラバラになり、今は新しい近所付き合いをしているが、前とは違ってむずかしい」と言う。F氏は「前は近所付き合いが良くて、暇な時はおしゃべりや困った時には手伝ってもらっていたけど、今は近所に漢族が多く住んでおり、我々は漢語があまり喋れなくてコミュニケーションもなかなか取れないよ」と言う。

### (3) 経済的問題とその要因

移民にともない発生する経済的な問題についてみてみよう。移民は政府からの援助と補助金が、多くの移民にとって最大の収入源になっている。

移住する際にもらった補助金を計算すると相当な金額になるが、このお金は活用できているのだろうか。調査の中で、B氏のような商売やって成功している人もいる。F氏の話によるとそのお金でギャンブルやお酒に使ってしまった人もいる。いきなり多額のお金が手に入るとどう使うかが分からなくて、活用できない人が多く、2008年から3年たった今はお金をほとんど使い終え、仕事もなく、夏と秋に農業の臨時業をやっている人が多いという。

多くの移民は、放牧していた時の収入の方が今より多いという。若い人はA鎮の中心や近くの農業などで臨時や長期の仕事があるが、高齢者の人は政府の補助金と年金でぎりぎりの生活を送っている。

次に、職業問題である。移住契約書で規定されている補助金や社会補助は実施されているが、住民が重視している就業問題は記載されている内容と実態が異なっている。今やお金がなく、仕事もない人が多い。

就業については、移民が自ら職業の訓練をし育成することができ、その金額は全額政府が負担すると契約書に書いてあるが、現状としては育成する場所がなく、低学歴のため受け入れる機関がないため、住民は肉体労働しかない状態である。

年齢別の所得格差の問題もある。若年層や中年層は、例えば、商売や出稼ぎなどで生活を維持でき、他の職業に就くこともあるが、高齢者層については生業転換されて以来、他の職業に就くのは難しく、補助金以外は収入を得る手段がないと言っても過言ではないだろう。

#### （4）アイデンティティの問題とその要因

牧民は、一箇所に定住することなく、居住する場所を一年間を通じて何度か移動しながら一番得意とする遊牧生活の中から得られる、生産や収入、またそれに伴う長年の歴史を持つ伝統文化も全部排除されてしまった。家畜の飼育を禁止し、牧民のヒツジ肉を中心とした食生活を変化させ、ヒツジをめぐるモンゴル民族の伝統文化を喪失されていると言えよう。

そして、生活上の問題に対処するために、若い移民たちは漢民族言語や文字を学び、異文化を吸収してきている。言語や文字などを勉強させるのは良いことであるが、それより失っている物が多いと言えよう。

結婚式や正月や、ナーダムの時には、家族、親族、地域の人々が集まり、様々な伝統行事が行われた。しかし、移住後は、そうした伝統文化を続けることができなくなってしまった。特に高齢者の人々は伝統が失われることをなげいている。モンゴル民族のアイデンティティの消失を危惧しているのである。

## 6 おわりに

ボリジギン・セルゲレンは、内モンゴルにおける「生態移民」政策について考察を行っている（セルゲレン 2007：130）。「生態移民」は単なる環境対策ではなく、移民の貧困脱出等を含んだ多目的行為あるとし、内モンゴルの事例から「生態移民」事業の成功例もあるものの、トラブルも数多いと論じている。移住の際には、住宅建設に多額の費用が必要な点や移住後の就業が不安なため、移住後の生活は不安にならざるを得ない等の問題を挙げている。

セルゲレン氏の挙げた問題がA鎮にも起こっている。移住後の住居を与えず、新住居の補助金として現金を渡されたのである。新住居を建てたり、買ったりした人が多いが、多くの金を無駄に使ってしまった人もいる。現在、もっとも問題なのは就業問題であり、移民の悩みになっている。結局、臨時的な職業しかできない人が多く見られる。これらの人達に安定した仕事与えるのが大きな課題であり、難問でもある。

西野は、山西省における「生態移民」政策に関する研究において、「年齢階層によって就業の選択の幅は異なり、中年、さらに老年は都市部労働市場にお

いて不利な立場に置かれることは予想できる。よって、もしも移民がなかば強制的に行われ、高齢者層が自給自足的手段をも失った場合、現状よりもさらに、経済的に追い詰められる可能性は高い」（西野 2007：98）と言う。

A 鎮では青年、中年層にはまだ力仕事があるが、高齢層には力仕事もなかなか難しい状況である。牧畜業しかできない牧民に農業をさせられても、すぐにできないことから農民もなかなか使ってくれないと、E 氏、F 氏が言う。両氏は年齢に関係なく働くことができる牧畜を懐かしく思っている。

韓霖は、青海省のチベット族の遊牧社会における「生態移民」政策の研究において遊牧文化の基礎となる放牧方式、組織形態（共同体あるいはコミュニティ）生活における食生活、婚姻、性役割、家族構成などの変容について論じた（韓霖 2011：135）。

韓霖は、「生態移民」政策の三つのタイプを比較している。①草地在まだ利用できる定住地、②牧民から農民への転換、③農民から農民を飛び越えて都市市民へ転換である。①は定住前と小さな変化にとどまっており、収入も前より増えたという。②は建設された定着的な農業の施設の利用により、ある程度の家計負担と就職圧力を緩和しながら、食肉を入手する生産様式と従来の肉食生活を守っている。③では牧民を完全に自家消費経済から市場経済に移行させたものである。③では、その転換過程に適応あるいは調和する能力がなく、適応と調和の方策を見つけ出す時間的機会も与えられていないため、生業が建てられず、経済的貧困に直面しているという。

①「牧草地在利用できる定住地」と②「牧民から農民への転換」はA 鎮では半農半牧から転換した、Y ガチャーとZ ガチャーに存在している。

②の農牧民タイプは青海省のチベット地区と同様で、ある程度の自立性があり、満足度もある程度高い。

③「牧民から都市市民への転換」タイプは、X ガチャーの牧民の場合と同じであるが、青海省のチベット地区と同様な問題に直面している。

これらの問題を解決するために、政府は2010年に新たな緊急通知を発表した。全旗の農牧民の仕事に対する精神や移民に安定した就業と住居問題の実現

にあたり、「五個一」<sup>12)</sup>を提供することを宣言した。「五個一」とは既に移民した人を対象に住まい一つ、技能育成一つ、仕事一つ、社会保険一つ、補助金一つを与えることをいう。

①住居問題は我が旗が目指す事業の一つであり、ひとつの難点でもある。それゆえ、鎮政府と旗が力あわせ、移民の経済に適する住居と低価格借り住宅の建設に力をいれる。

②移民の収入を上げるため発展方式のチャンスをあたえる。就業育成をし、住居保障をし、早い就職と早い住居を与えるため、政府が市場化を進め、専門家育成、企業化による仕事、一体化によるサービスを導き、移民の就業率を100%達成させ、住居安置率も100%達成させる<sup>13)</sup>。

X旗政府がこのような「五個一」を通知したのは、2007年の「禁牧」以来の移民の生活実態を認識しているとみられる。しかし、この難問をX旗政府がどのぐらいの期間でどのような結果を移民に与えることができるのか、移民は注目している。

本研究では、「生態移民」政策のプロセスにも注目した。「休牧」「区画輪牧」などの初期の政策で、牧民は無駄な出費と労力を強いられた。それに対する保障はない。こうした政策の矛盾について、牧民は政府に対する信頼をなくしたと言える。

「移住期間」を定めているが、それが、実施されるかどうか、移民たちは不安を持っている。「生態移民」政策は今後も続くので、今後も注目していきたい。

## 参考文献

〈日本語〉

加藤弘之（2003）「『西部大開発』の状況と課題」『地域の発展』名古屋大学出版会、147-169頁

シンジルト（2005）「『生態移民』をめぐる住民の自然認識——甘肅省肅南ヨル族自治県A村における事例から」『中国の環境政策——生態移民』昭和堂、1-17頁

スエー（2005）『生態移民による新たな草原開拓』小長谷有紀・シンジルト・中尾正義編、

---

12) 「五個一」とは五つのことを一つ一つということである。

13) X旗人民政府事務所（2010）46号参照。



- 『中国の環境政策——生態移民』昭和堂、77-93頁
- ソロンガ（2007）「中国内モンゴル自治区オールドス地方における「白いスウルデ」祭祀とその復活——歴史、伝承及び祭祀集団をめぐるエスニシティを中心に」『国際文化研究科論集』9：106頁
- 朝勒門其其格（2011）修士論文
- 那木拉（2009）「牧畜から生態移民へ——内モンゴルシリングル盟を事例として」『千葉大学人文社会科学研究』18：111-126頁
- 西野真由（2008）「中国山西省における生態移民政策に関する一考察」『愛知県立大学外国語学部紀要』40：87-99頁
- 施国慶（2005）「生態移民」による貧困削減の効果——内モンゴル自治区アラシャ盟における実践と教訓」小長谷有紀他『中国の環境政策 生態移民——緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防ぐか?』昭和堂、270-288頁
- ボリジギン・セルゲレン2007「生態移民——内モンゴルを中心に」『中国環境ハンドブック2007-2008年版』蒼蒼社、130頁
- 〈モンゴル語〉
- エ・エルデンシャフ サラナ（2006）『遊牧経済論』内蒙古出版社
- 〈中国語〉
- 東梅（2010）『農牧交錯帯生態移民総合效益评价研究』中国社会科学出版社、59-61、67-71頁
- 初春霞（2006）『生態移民与内蒙古經濟可持續發展』農丘現代化研究2：104-109頁

## 資料

- 「生態環境回復事業に伴う移民の就業育成の方針について」（X旗人民政府文献2007；36号）
- 「X旗農牧局2008年上半期における業務総括」
- 「生態自然回復区における移民の就業育成と住宅安置事業の緊急通知」
- 「X旗生態自然回復区管理暫時施行方法」
- 「X旗政府ホームページ」[www.hiq.gov.cn](http://www.hiq.gov.cn) 2011年10月26日